

観測によれば、冬季北西季節風時でも、北陸地方内陸では、地上で南西風が卓越する。海上で季節風が発達したときは南西風は一層活発となり、海岸を越え海上の北西風との間に不連続線を形作る。北陸不連続線と呼ばれたものはこれで、過去には海岸豪雪の元凶と考えられたが、これは海岸豪雪のときのみ出現するのではなく、内陸のみの豪雪時にも存在する。この南西風の高さは数100mに過ぎない。しかし、上層の北西季節風との間には、この南西風の反流があって、全体の高さは1000mを越す

かも知れない図(a)のような1つの環流を形成しているので、山岳の中腹以下では下降気流となっているはずである。一方、雪雲のエコーは、雲の中でも比較的大きい雪片からのもので、落下し易く、山体に近づくに従って落下し、雲の底部に集り、遂には上記の下降気流の中におちこみ、エコーは姿を消し、そこで豪雪になると想像される。山体が海岸に近過ぎたり、山の高さが低過ぎるような場合は雪雲は山を越して流れる。

### 第15期第16期新旧合同理事会議事録

日 時 昭和45年6月15日(月) 15.10~16.00

場 所 気象庁観測部会議室

出席者 山本、大田、根本、有住、岸保、大井、小平、北川、須田、中島、磯野、日下部 各旧理事  
関口、藤原、伊藤、駒林、関原、川村 各新理事

報 告

旧理事会よりの引つぎ事項：(第15期第17回理事会議事録参照)(本件処理は新理事会で行なうこと)

庶務：1. 6月3日 日本学術会議構造研究連絡委員会耐風構造分科会委員長から構造物の耐風性に関する第3回国際会議後援の依頼がきた。

2. 6月8日 日本地球物理学連合幹事日本海洋学会、梶浦欣二郎氏から日本学術会議事務局図書課で10年を経過した次の刊行物は希望があれば譲与すると連絡があった。

Astronomy and Geophysics VOL 1-VOL 21  
1922~1947

天文学及地球物理学邦文輯報 No. 1~No. 4

昭和15~18年

3. 6月12日(社)大気汚染研究全国協議会会長から第11回大気汚染研究全国協議大会を10月6日~9日、大阪市東区京橋 1-7 K.K. 大阪マーチャンダイズマート、19.20Fで開催するので、参加と、研究発表申込方について案内がきた。

演題申込、6月30日

4. 6月13日 東北支部から支部役員の新任報告がきた。

学 会 賞：発明協会から表彰者すいせん依頼があったが、測器課に連絡したところ、今回はないとのことであった。

外国文献：若干未回答のものもあるが、とり進めつつある。

長期計画：秋季大会に長期計画に関しシンポジウムを開く予定。